

平成28年度 神奈川歯科大学
一般入学試験2期
大学入試センター試験利用2期
平成28年2月21日(日)

小論文問題用紙

受験番号	1	6						
	1	6						

氏名	
----	--

※机上の受験番号を記入してください。

- 問1. 次の文を読んで、本文にふさわしい表題を25字以内でつけなさい。
問2. 本文の内容についてあなた自身の考えを400字以上600字以内で論じなさい。
(答は解答用紙に書くこと)

核家族化した超高齢化社会において、認知症の親を、夫を、妻を個人で介護することはほとんど不可能です。特別養護老人ホームは現代の駆け込み寺です。老衰のため体力を失った体は様々な病的状態を呈しています。それをどこまで病気として取り扱うか、治療の対象にするか、冷静な対応が必要です。どこまでも医療をすればそれでよいというものではありません。それはかえって余計な負担をかけることに繋がりがかねません。尊厳ある自然な終焉が最も苦しみの少ない幕引きであるならば、誰もそれを否定はできないでしょう。

外科医として四十数年働いてきて私が気づいたことは、医師は病気を治せても、それはその人の人生の一時期の事件を解決しただけであって、根本的にはその人の人生の、大きな流れを変えることはできないということです。例えば動脈硬化による血管の詰まりは治せても、動脈硬化の本質である老化自体を止めることはできないのです。

私は四十代の頃、胃がんの患者を受け持つことが度々ありました。がんが比較的早期で手術が間に合って助かったと思われる方の部屋へは得意な顔をして一日に何回でも顔を出すのに、手遅れの方のところへはつい足が遠のいてしまいました。心をケアする役目から逃げていたのです。病気だけを診ていたのです。これは看取りとは正反対の姿勢です。“その人”を看てはいなかったのです。

高齢者の医療は単純に体の治療をすればよいというものではありません。今私は、特別養護老人ホームで働いていて、このことを痛切に感じます。本人の一生の中での現時点において、この病態がどういう意味を持つのか、何をしてあげるべきなのか、正に人を見て医療を行わなければなりません。主役はキュアではなく、ケアに移っています。

医療技術の発達により、胃瘻による延命が可能になりました。誤嚥して肺炎になり、入院した病院で胃瘻を作るか、そのままにしてホームに戻るか、家族は選択を迫られます。いつまでも病院に居られない今の制度のもとでは、なかば当然のこのように胃瘻を作り、後方の施設(例えば特別養護老人ホーム)に送り返されているのです。そのようにして生かされている入所者に穏やかな看取りがあると言えるでしょうか。もちろんそれを決めるのは先ず本人ですが、それが本人にできない場合がほとんどです。ご家族が決めなければならないのです。誰か手助けが必要です。支えが必要です。それが医者である場合は、単に体を助けるだけの医者ではありません。最期の迎え方についてともに考え、お互いに意見を言い合えることが必要です。

石 飛 幸 三

「口から食べられなくなったらどうしますか 「平穏死」のすすめ」(講談社)